

## 日蓮遺文と『注法華經』(佐前期)

関 戸 堯 海

日蓮の遺文中に引用される諸經論疏の要文で、『注法華經』に注記されているものも少なくない。『注法華經』では『法華經』に説かれる教理内容と直接関連する要文が集められている場合も多く、このような事例から、日蓮が『法華經』を中心とする教義を樹立し、所説を論証していくための覚悟として『注法華經』を作製したと推察できる。

しかし、『注法華經』には日蓮の解説が付されているような注記の例はほとんどないが、遺文中の要文引用は前後の文章からみて引用の目的が明確なので、『注法華經』の注記と比較することによって、『注法華經』作製の目的を知る上で重要な要因となってくるはずである。そこで、本稿では佐渡流罪以前を中心に、遺文と『注法華經』とに共通する要文を取り上げ、その引用・注記の特徴について検証したい。

『戒体即身成仏義』(仁治三年・一二四二)

①『梵網經』『華嚴經』を引用し「爾前の円」と「法華の

円」を相對する(定五頁)。「注法華經」提婆達多品に即疾頓成の例として『梵網經』『華嚴經』等が注記されるが、『戒体即身成仏義』との関連は明確ではない。

②『瓔珞經』の戒を權大乘に位置づける(定六頁)。「注法華經」結經にまとめて『瓔珞經』が注記されるが、『戒体即身成仏義』との関連は明確ではない。

③『法華文句』『法華文句記』を引用し、五戒十善・權大乘に趣く二乗も菩薩も方便品・授記品の文によつて開會されるとする(定一〇頁)。「注法華經」方便品には一切皆成に關する要文が集まっているが、『戒体即身成仏義』に引用の『法華文句』『法華文句記』の文もそこにみえる。

【特徴】『戒体即身成仏義』との關係は判然としないが、引用される要文のいくつかが、『注法華經』の中に注記として残っており後々活用されている。

『一代聖教大意』（正嘉二年・一二五八）

①『華嚴經』『般若經』『梵網經』等を引用して「爾前の円」と「法華の円」を相對する（定六四頁）。『注法華經』提婆達多品には諸經の即疾頓成の例として『華嚴經』『般若經』『梵網經』等が注記されており、『一代聖教大意』の論旨と同基軸にある。

②悪人成仏・女人成仏について『無量義經』『華嚴經』『普超三昧經』『菩薩処胎經』等を引用するが（定七〇〜一頁）、これらは『注法華經』の提婆達多品にも注記される文である。【特徴】悪人成仏・女人成仏など引用の意図が明確であり、『注法華經』提婆達多品の注記の傾向と一致する。

『守護国家論』（正元元年・一二五九）

①「大文第一の二諸經の浅深を明かす」で『無量義經』説法品、『法華經』法師品（已今当・難信難解）によつて『法華經』が諸經にすぐれることを論証するが（定九三〜四頁）、そこに引用される『涅槃經』聖行品・如来性品、『密嚴經』『大雲經』の文は、『注法華經』法師品（已今当・難信難解）に注記されるものである。

②大文の第一・二・四・五・六・七では『涅槃經』から広範に引用して、『法華經』が諸經にすぐれること、謗法の者

を対治すべきこと、善智識ならびに真実の法には値いがたきことなどを論証するが、これらの多くが『注法華經』法師品・勸持品・安樂行品にまゝつて注記されている。

【特徴】『法華經』の法師品や勸持品などの教理内容と、引用される『涅槃經』の要文との関係がよくわかる。要文が後に『注法華經』として整理されていた過程が推察される。

『十法界明因果鈔』（文応元年・一二六〇）

①菩薩戒について検討するにあつて『瓔珞經』から二文引用するが（定一七九頁）、これらは『注法華經』結經にみえる文であり、『戒体即身成仏義』と同様な一面がある。

②『梵網經』『華嚴經』『般若經』を引用して、爾前の諸經にも速疾頓成の戒が説かれるが、どうして『無量義經』では歴劫修行の戒とみるかについて論じている（定一八一頁）。『注法華經』提婆達多品（龍女の即身成仏）で速疾頓成に関する要文が集められている部分にこの文がみえる。

【特徴】『梵網經』『華嚴經』『般若經』の要文が、提婆達多品の龍女の即身成仏に関連することがよくわかる。

『唱法華題目鈔』（文応元年・一二六〇）

①『法華經』の一字一句の結縁と、易行の念仏とを比較して、『法華經』化城喻品の十六王子の三千塵点劫の結縁につ

いて論じるが(定一八五頁)、その論旨の基調にあると思われる『法華文句』『法華文句記』の文は、『法華華經』化城喩品に注記されるものである。

②『法華華經』随喜功德品の「一念随喜五十展転」に関する天台・妙楽の釈として『法華文句』『法華文句記』に基づく念仏側の見解を示すが(定一八五頁)、『法華華經』化城喩品(裏面)随喜功德品で五十展転に関連して注記される。

③念仏側の主張に反論するために、五十展転・一念随喜について検討する。ここで、『法華文句』『法華文句記』などを基調として天台・妙楽の初随喜・名字即についての主張を紹介するが(定一八七〜九頁)、これらの文が『法華華經』化城喩品・随喜功德品に注記される。

④『法華華經』と四十余年の諸経の相違についての見解は、『授決集』『註無量義經』に基づくものと考えられが(定二〇一〜二頁)、これらの文が『法華華經』開経に注記され、十功德品ないし説法品「四十余年未顕真実」との関連が注目できる。

【特徴】化城喩品(三千塵点劫)および随喜功德品に関連して、初随喜・一念信解について『法華文句』『法華文句記』などの天台・妙楽の見解を重要視していることが『唱法華題目鈔』での引用と『法華華經』での注記によってよくわかる。

### 『立正安国論』(文応元年・一二六〇)

①第七番問答(災難の対策についての問答)では『法華華經』譬喩品「若人不信毀謗此經 即断一切世間仏種」および『涅槃經』『仁王經』を引用して、正法を誇る人を禁じて正法を信じる人を重んじるべきことが説かれるが、『涅槃經』一切大衆所問品・寿命品・聖行品・梵行品の文が『法華華經』譬喩品「若人不信毀謗此經」の近辺に注記されている。

【特徴】『法華華經』譬喩品「若人不信毀謗此經 即断一切世間仏種」の『法華華經』誹謗と墮地獄に関連して引用される『涅槃經』の文の数々が、『法華華經』譬喩品にまとめて注記されていることがわかる。また『立正安国論』での『涅槃經』の引用は、『涅槃經』を多角的に引用する『守護国家論』と同基軸にある。

### 『教機時国鈔』(弘長二年・一二六二)

①舍利弗と金師・浣衣の者の説話を通して、末代の機根を知ることが容易でないことを述べる(定二四二頁)。この説話は『涅槃經』高貴徳王菩薩品に基づくものと考えられ、『法華華經』妙莊嚴王品で浄蔵・浄眼の説話に関連して善智識についての要文が集められている部分に注記される。

②『法華華經』の弘通と法敵の出現について述べるにあつ

て、『法華經』勸持品・法師品・安樂行品の未來記および『涅槃經』如來性品と章安の『涅槃經疏』を引用するが(定二四五頁)、『注法華經』勸持品の二十行の偈の付近に「死身弘法」「誹謗大乘經典」「惡比丘」などについて説く『涅槃經』の要文が連記されており、『教機時国鈔』に引用される『涅槃經』如來性品と章安の『涅槃經疏』もそこにみえる。

【特徴】妙莊嚴王品と勸持品の經文の説示に関連して、要文が集められるという『注法華經』の特徴がよくわかる。

### 『顯謗法鈔』(弘長二年・一二六二)

①『無量義經』「四十余年未顯真実」に関して、得一の所論に対する伝教大師の反論が記される(定二五七頁)。ここに示される伝教大師の見解は『註無量義經』『守護国界章』『法華秀句』に基づくと考えられるが、『注法華經』開經(『無量義經』「四十余年未顯真実」の近辺)に注記される。

【特徴】『無量義經』「四十余年未顯真実」に関連して『註無量義經』『守護国界章』『法華秀句』の要文が注記されていることがよくわかる。

### 『華嚴法相三論天台等元祖事』(弘長年間)

①「華嚴宗の元祖」について述べ、華嚴宗の教判「五教」を図示するが(定二九〇四〜五頁)、そこに『華嚴經』入法界

品が引用される。また「天台宗の元祖」について述べ、『法華玄義』を引用するが、これらの文は、『注法華經』安樂行品で『法華經』と『華嚴經』を対比する内容の要文が集まっている部分にみえる。

②「法相宗の元祖」について述べ、法相宗の教判「三時教」を図示する(定二九〇七頁)。これは『五百問論』の見解を下敷きとしていると考えられるが、『注法華經』信解品では「五時八教判」で擬宣・誘因・彈呵・淘汰・開顯に配当される「長者鷄子喩」に関連して「三時教判」に関する要文として、この『五百問論』が注記される。

【特徴】華嚴宗の「五教判」法相宗の「三時教判」に関連する要文が『注法華經』に集められている部分があることがわかる。

### 『女人成仏鈔』(文永二年・一二六五)

①爾前の諸經で女人の成仏が否定されてきたことについて『華嚴經』『銀色女經』を引用する(定三三四頁)。「注法華經」藥王菩薩本事品では、女人の往生について説く經文の近辺に「女人成仏」に関する要文が集まっている部分にみえる。

②『法華經』提婆達多品の「女人成仏」について『法華文句』『海龍王經』等を引用して論じるが(定三三五〜六頁)、これらの文は『注法華經』提婆達多品で「女人成仏」に関する

要文が集められている部分にみえる。

③源信の妙法経力についての所論を紹介し、あわせて『普賢菩薩行法経』の文に基づき『法華経』によってこそ成仏が可能であることを論じるが(定三三四頁)、『法華経』如来神力品で如来の神力についての要文を集めたと思われる部分に『普賢菩薩行法経』の注記がみられる。

【特徴】引用される要文が「女人成仏」「如来の神力」など『法華経』の内容と直接関連することがよくわかる。

#### 『薬王品得意鈔』(文永二年・一二六五)

①薬王菩薩本事品の十喩のうち「大海の譬」「山の譬」について述べるが(定三三七〜九頁)、ここでの所論は『華嚴経』十地品を下敷きとしていると考えられる。『法華経』薬王菩薩本事品では十喩の近辺に『華嚴経』の注記がみえる。

②女人往生の障害として五障・三従をあげ『銀色女経』を引用するが(定三四一頁)、『法華経』薬王菩薩本事品で女人の往生に関する要文を集めたところに、この文がみえる。

③『無量義経』「四十余年未顕真実」と『涅槃経』梵行品を引用して、爾前諸経において女人が往生成仏できないと説くのは妄言であると指摘するが(定三四二頁)、『法華経』開経(『無量義経』「四十余年未顕真実」)に梵行品の文が注記されている。

【特徴】女人成仏・十喩・法華最勝をめぐる引用される要文が、それぞれ関連の深い『法華経』の各品に注記されることがわかる。

#### 『法華題目鈔』(文永三年・一二六六)

①『女人成仏鈔』と同様な表現で、女人の成仏が諸経に否定されてきたことを『華嚴経』などの引用によって論じる(定四〇〇頁)、『法華経』薬王菩薩本事品で、女人の往生について説く経文の近辺に「女人成仏」に関する要文が集まっているが、そこにこの文が注記されている。

【特徴】『華嚴経』の要文が薬王菩薩本事品の女人の往生に直接関連することがよくわかる。

#### 『行敏訴状御会通』(文永八年・一二七二)

①『無量義経』「四十余年未顕真実」および『涅槃経』梵行品、『維摩経疏記』等を引用して、爾前の諸経を妄言と称するのは日蓮の私言でないことを論証するが(定四九八頁)、これらの要文は『法華経』開経(『無量義経』「四十余年未顕真実」)に注記される。

②日蓮の教えを信奉し集まる門弟を凶徒と称し、武器を集めていると非難されることに対して『法華文句記』『法華疏義讀』『涅槃経』金剛身品『摩訶止観』『涅槃経疏』『摩訶止

観弘決』を引用し、『法華經』勸持品の三類の強敵に言及して反論するが(定四九九頁)、これらは『注法華經』勸持品で三類の強敵に関連する要文が集められている部分にみえる。

【特徴】『無量義經』『法華經』勸持品の經文の内容と直接関連する要文が集められていることがわかり、『注法華經』の注記の特徴を示すよい事例である。

### 『寺泊御書』(文永八年・一二七一)

①『涅槃經』の「贖命重宝」に言及し、『法華文義』『法華玄義釈籤』を引用するが(定五一三頁)、これらは『注法華經』方便品・法師品・分別功德品に注記される。方便品では一念三千に関連して悉有仏性に関する要文が集まる部分に注記され、法師品では積尊滅後の修行者の迫害についての注記として、そして分別功德品では得道の問題を通して『法華經』『涅槃經』の勝劣に関する要文として注記されている。

②『法華經』勸持品の二十行の偈を引用して、受難こそ末代の「法華經の行者」の証にほかならないと述べて、『正法華經』『添品妙法蓮華經』を引用するが(定五一五頁)、これらは『注法華經』勸持品の二十行の偈の付近に注記される要文である。

【特徴】遺文の引用と、『注法華經』の注記が同基軸にあることをよく示す。佐渡渡航直前の緊迫した状況での執筆に際

して、どのような要文集を活用したのかが興味ある点である。

叙上のように、佐渡流罪以前の遺文をみてみると、『守護国家論』『立正安国論』などに引用される経論疏の文は、のちのち日蓮の教学を構築する上での重要な論拠として用いられ、『注法華經』にも整束された形で注記されていることがわかる。また、遺文中の『無量義經』「四十余年未顕真実」、『法華經』提婆達多品・藥王菩薩本事品「女人成仏」、勸持品「二十行の偈」などに関する引用によって『注法華經』各品における注記の意図がいよいよ明確になってくるが、特に佐渡流罪直前の『行敏訴状御会通』『寺泊御書』の引用によって、かなり整理された要文集の存在が推察される。今後は現存『注法華經』の筆跡推定年次を念頭に置きつつ、佐渡期以降の遺文を検証していきたい。

※山中喜八編著『定本注法華經』等を参照。日蓮遺文は『昭和定本日蓮聖人遺文』に依り(定〇〇頁)と表記。

(キーワード) 日蓮、遺文、『注法華經』、要文

(身延山大学助教授)